

文化高知

'95年5月 NO.65



(財)高知市文化振興事業団

「水中会話」松林 誠

地域の文化にパワーを

鍵岡 正謹

高知市の文化行政は進んでいる、とよく聞く。高知県のそれと比較していうらしい。本誌のような刊行物を出す高知市文化振興事業団の先駆的な存在や市民図書館の先駆的シテム、「土佐名物」の自由民権のため記念館建設を指すらしい。確かに県の文化行政といわれるものが遅れていて、ようやくその姿をみせはじめ、いよいよ本格化する現状からみれば、そのようにいえるかも知れない。

ところで、文化は人間の生活そのものであり、私たちの暮らしぶりそのものが文化というなら、その地域に根ざした生活はストレートに「文化」に結びつく。地域が固有に営む文化こそが、本物の文化の姿であろう。そのためには息の長い蓄積が必要であり、高知市が早くから先駆的に文化を振興してきた業績は高く評価されるだろう。問題はこの先である。

固有な文化が地域に在り、それが活発に動いていたならば、その文化が中央や他の地域に刺激を与えたり、交流がなされているはずである。僕の念頭にあるのは、次のようなことだ。

僕は高知に来て約二年になる。高知のさまざまな芸術や文化に触れる機会を持ち、多くの新鮮な刺激を受けた。ところがこうしたことは東京に居る間は、全く耳にすることさえなかった。例えば、高知市文化振興事業団や市民図書館が活発に刊行している書籍や刊行物には、実に貴重なものが多い。しかし東京では全く目にすることもなく読む機会もない。出版物はその地域の文化を知るうえでの役割は大きいし、その水準は地域文化の高さを象徴する。こうした刊行物が他の地域に知られていないのは残念であり不思議である。地域の文化が発信され交流されていない、といわざるを得ない。

文化は交流されてこそはじめて人びとの生活のなかの文化的なるものとなるわけである。そうでなければ自己満足となり、やがては息がつかまる閉塞状態に陥る。地域の知的水準を表現した活字文化はもとより、芸術活動がその地域で行われていたとしても、自己満足で終わってしまったケースが多い。多分、多くの地域でそのような状況となっているのだろう。情報化時代といわれる今日こそ、地域だけで終始しない、地域固有の文化を大いに発信しなければならぬし、地方分権の時代を担う基本だろう。そうした時代に入り、例えば先駆的な高知方式と呼ばれた市民図書館はどうだろう。情報化時代に遅れをとっていないか。長くつづいて高知市文化祭はどうだろう。旧態依然に陥っていないだろうか。芸術文化は伝統的な文化の蓄積と同時に、絶えず新鮮な息吹を吹きこまなくては創造する力は枯渇してしま

う。例えば、「高知市展」はどうだろう。

四十七回を迎える高知市展は、高知新聞社が主催する県展ともども長い年月を経てきた。これまた美術での先駆的な役割を果たしてきた。県展が作品を公募し審査する方式をとっているのに対して、市展は作家が自由に作品を持ちより発表する、いわゆるアンデパンダン方式である。自由な創造活動の自由な発表の場であるアンデパンダン方式の市展に、僕は実のところ眼を見張り、大いに注目していた。一九五〇年代末から六〇年代にかけて、東京都美術館での「読売アンデパンダン」展は、若い美術家の情念を噴出させた画期的な芸術表現の場であった。アンデパンダンこそ、新しい芸術創造と表現に最もふさわしいと思いついていた。僕は、市展に大いに期待した。しかし残念なことに、現状はそのようにはなっていないようだ。せつかくのアンパン方式が生きていない。どこかに問題が在る、としか考えられない。



よさこい祭りに爆発的なエネルギーを放出する若いパワーを、あのパワーこそ市展の場で発揮されることを願う。若いエネルギーは方途を求めているのだ、と思う。
(高知県立美術館館長)

二十一世紀の南海地震に備えを

尾池 和夫

二〇四〇年頃、次の南海地震が起こる。それは一九四六年(昭和二一)に起こった南海地震と同じマグニチュード8クラスの巨大地震である。この発生時期はいろいろの方法で予測されていて、十年ほどの幅はあるが、二十一世紀の半ばまでにはほぼ確実に発生するといえる。

南海地震はフィリピン海プレートと西南日本の境界に起こる。フィリピン海プレートは、四国の沖にある南海トラフと呼ばれる海溝から西日本の下にもぐり込みながら、陸側の岩盤を引きずり込んでいる。そのため室戸岬や潮岬は今だんだんしずみ込んでいく。引きずり込まれて携んだ陸側の岩盤は、やがて耐えきれなくなつて跳ね上がる。そのとき巨大地震が起こる。

南海トラフのような巨大地震は、ほぼ百年に一度起こる。跳ね上がる前の五十年ほどの間、西南日本の内陸の活断層帯は、地震の活動期にな

る。この活動期は南海地震のあと十年程度続き、そのあとに数十年の地震活動の静穏期がおとずれる。

一九四六年の南海地震の前には一八五四年の南海地震があった。さらに前にさかのぼると、一七〇七年、一六〇五年、一四九八年、と歴史をたどることが出来る。西南日本内帯はそのたびに数十年間の地震活動期を迎えた。

前回の活動期は一八九一年の濃尾地震から始まった。北丹後地震、鳥取地震など多くの活断層運動があり、東南海地震と南海地震の二つのプレート境界型の巨大地震が連続したあと福井地震などがあって、その後しばらく西南日本は静穏期であった。

一九九五年一月十七日の兵庫県南部地震は次の西南日本の地震活動期の到来を告げるものであり、そのことは次の南海地震が五十年ほどして起こるといふことを示している。四国の中央部をほぼ東西に横切る

中央構造線は長距離にわたる活断層で、マグニチュード8クラスの地震を起こす。その中央構造線から北側を西南日本内帯と呼ぶ。活断層はこの内帯に密集している。活断層は、その真下の岩盤が、この数十万年の間に繰り返し大地震を起こしてずれた傷跡である。活断層の、とくに上下のずれによって数百メートルの落差ができて平野や盆地が形成され、



そこに都市が発達した。濃尾平野も近江平野も京都盆地も奈良盆地も大阪平野もこうして形成されたものである。したがって内帯では都市の直下に活断層がある。大地震が起こると多くの場合その真上に都市がある。中央構造線の南側、西南日本外帯には活断層がない。高知県の直下には活断層がずれて大地震を起こす心

配がない。したがって大きな平野も盆地もできなかった。陸地の活断層を動かすような大地震では、震源の破壊面から出た地震波は、震度7や6の強い地震動を真上の都市にもたらして構造物を破壊するが、高知県にはそのような心配はまずない。沖のプレート境界が跳ね上がると、震源の破壊面から陸地が遠いので、地震動は震度6か5であるが、地震動のあと高知県の海岸には大津波が押し寄せる。

四十年や五十年はすぐに過ぎる。今建造する構造物は次の南海地震のときまで使っているものが多い。防災対策は子孫のためにこそ実施するものであると私は考える。

あと数十年で南海地震が起こるといふ情報は地震の長期予報である。そのような長期予報がある以上、南海トラフからの津波を歴史上繰り返し受けてきた地域の人たちは、この地域を、静岡などと同じく、大規模地震対策特別措置法にもとづく地震防災対策強化地域に指定するよう早く要求した方がいい。そして防災対策を進めるとともに、次の南海地震までには短期予報を出せるよう観測網を早く設置した方がいい。これが、三重や和歌山、そして高知の方々への、私のメッセージである。
(京都大学教授 地震学)

第五回高知出版学術賞の 審査を担当して

中内 光昭

第五回の高知出版学術賞の審査が池川順子、今井嘉彦、紫藤貞美、西野勉、依光貫之各氏、それに私の六名によって行われました。例年通り委員長は私が務めさせていただきしたので、審査の経過を簡単に報告いたします。

昨年は三十九点の応募があり、自然科学関係のものもかなり見られましたが、今年は十六点の応募で、とりわけ自然科学関係が少なく、その結果、授賞作品も人文科学に片寄ってしまいました。本県在住者の学術出版物であれば、特に本県と関係が深いとは言えない、たとえば宇宙や生命現象を対象としたようなものでも当然授賞の対象となるので、今後多数の応募を期待しております。

本年は、第一回の会議で八点の候補作品を選び、各作品を数名の委員が精読後、担当委員のコメントをも

とに候補作品をさらに絞りました。その結果、次の六点が最終審査に残りました。

『ものがたり考古学』（岡本健児著）、『江戸の親子』（太田素子著）、『土佐の農業』（池上巨著）、『西原清東研究』（間宮國夫著）、『日本中央市場史研究』（田村安興著）、『土佐自由民権運動日録』（土佐自由民権研究会編）。

これらのうち、『西原清東研究』と『土佐自由民権運動日録』の二作品は多くの委員から一様に評価されましたが、残りの四編をどのように考えるかについては、いろいろの意見がでました。

本賞ではもともと啓蒙書も対象に含めております。啓蒙書の中には、従来の知見をただ羅列して紹介するようなものもあるわけで、そのようなものの『学術』的評価は当然低くな

ります。しかし、研究の成果や学問の楽しさを一般の人々に、自分の体験を通して語りかけ、その分野への正しい理解を深めることは、ベテラン研究者の社会的責任でもあります。そのような観点から啓蒙書は審査されました。

一方では、本賞の目的とする、地域の文化振興の観点からすると、すでに完成期を迎えた研究者に賞を与えるより、少々未熟でも、今後の活躍が期待できる人々に、激励の意味で授賞する方がいいのでは、という意

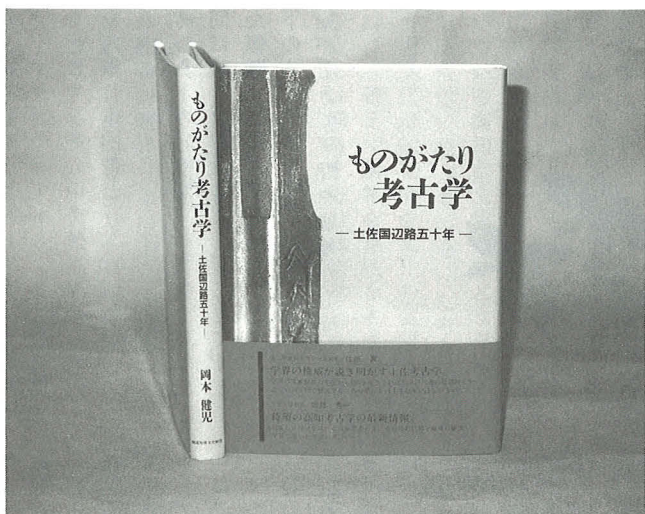
見もできましたが、結果的には、出版物の内容が決め手になりました。いろいろの観点から論議の結果、全会一致で『ものがたり考古学』が授賞作品に加えられました。残りの三点もいくつかの面で高い評価を受けました。以下授賞理由について簡単にのべることにします。

『ものがたり考古学』

— 土佐国辺路五十年 —
（岡本健児著・高知県文化財団刊）

例を高知県にとり、豊富な実例や経験をもとに、考古学の方法や出土品からの推論などを平易かつ興味深く述べた入門書です。著者の言葉を新聞記者が青少年向きに書き直したことも手伝って、大変読みやすい文章になっており、無駄がなく、密度の高い啓蒙書です。

高知県の先史時代からの歴史と著者の研究歴とが巧みに重ね合わされ、読んでゆくだけで、考古学の魅力に引き込まれてゆきます。最新の知見もふんだんに盛り込まれ、単なる入門書を越えた学術的価値があると評価さ



集し、時代背景との関連で彼の行動を分析しています。

全体の構成も論理的で、西原清東の伝記の決定版であると共に、人物伝の一つの典型にもなりうるという評価も受けました。

『土佐自由民権運動日録』

（土佐自由民権研究会編・高知市文化振興事業団刊）

土佐自由民権研究会のメンバーが十年に余る歳月を費やし、いわゆる土佐自由民権運動にまつわるさまざま

まな出来事を、正確に日を追って、民権派、反民権派の両面から、徹底して記録したものである。綿密な計画と緻密な資料収集により、日を追って読むだけで民権運動の熱気が伝わってくるだけでなく、土佐自由民権運動の全体像が浮かんでくる。すでに単なる『資料』を越えたものであると評価された。

本来、単調、退屈であっても少しもおかしくない出来事の羅列が、一つのドラマのように読者に迫ってくるのは、民権運動自体のドラマ性に加えて、研究会メンバーの執念ともいえる熱意により、高い密度で資料が集められた結果と敬服しております。

各記録の展覧史料も明記されており、今後、この分野の研究を行う場合、必見の書となることは間違いありません。

本年の授賞作品はすべて県内で出版されたものが選ばれました。これは、県内出版物を優先的にとりあげたためではなく、中央で出版されたものと対等に内容を審査した結果の産物です。このような素晴らしい出版物が県下で企画・発行されているのは地域の誇りであり、関係者の識見と努力に改めて敬意を表します。

（高知大学学長）

れました。

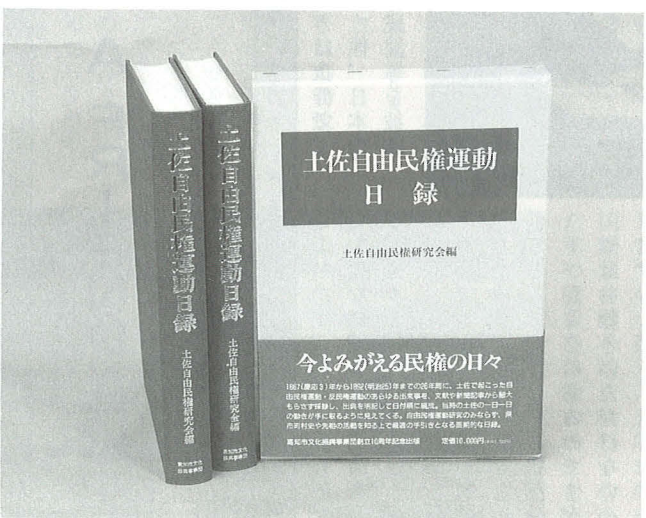
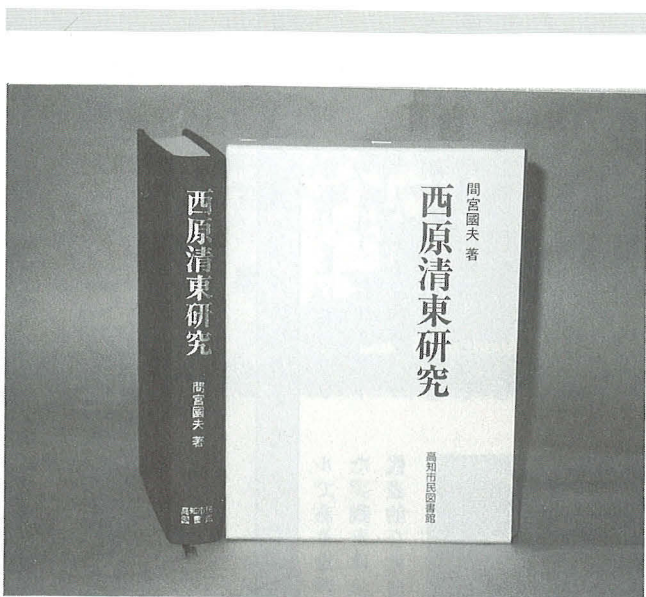
本書により、本県での考古学の歴史がわかるだけでなく、本県が考古学にとって、文字通り『宝の山』が埋まっている『魅力ある地域である』ことも理解できます。

本書の授賞には、今後、他の分野でもこのような啓蒙書が出されてほしいとの願望も込められています。

『西原清東研究』

（間宮國夫著・高知市民図書館刊）

現在の土佐市に生まれ、国内では



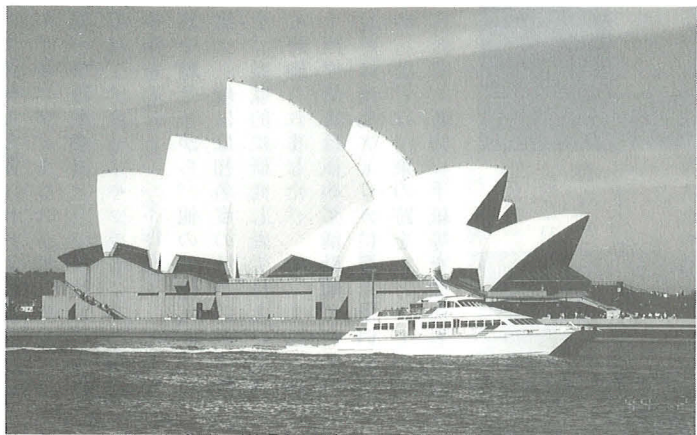
音楽を通しての国際親善と『BEA FRIEND』体験記

橋本 憲佳

昨年八月二十五日、私たちフラワ
ーソングクラブ〔注1〕はオースト
リアのシドニーにあるオペラハウ
スにおいて日豪親善のための合唱音
楽を披露し、民間文化使節としてそ
の任務の一端を果たしてまいりまし
た。

この演奏会は両国民の文化交流に
よって互いの国の理解と親善とを図
る目的をもって開催された行事で、
この行事への出演要請状がシドニー
市長から直接私宛に送られてきたの
が一昨年の秋。私はその趣旨に賛同
し、早速団員の中から有志四十七名
の合唱団を編成して実現した特別の
演奏会(ジャパン・フェスティバル
の中の音楽ステージ)でした。
その会場は、あの一見独特の形を
したオペラハウス(写真参照)のコン
サートホールで、音響設備はもちろ
んのこと、あらゆる面で世界最高級
を誇っているものであり、私どもの
演奏は二七〇〇名収容という大ホー

ルでありながらその響きは抜群でし
た。我々は「荒城の月」他、日本の
代表的な歌曲や世界の民謡等を披露



しましたが、聴衆の熱狂的ともいえ
る大変な歓迎ぶり、演奏が終わる
や、延々と続く嵐のような拍手のた
めに、しばらくの間ステージから
退場できないほどの声援に、ただ
ただ言葉では言い表せない感動あ
るのみでした。その状況の録音テ
ープがここにあるのですが、紙上
ではお聴きいただけなのが残念
です。

このようにクラブ員一同、音楽
を通じての国際交流と民間レベル
での友好親善のためにいささかな
りともお役に立つことができたこ
と、その上、予想以上の成果を取
り、帰国できたことに大きな感銘
を受け、改めて奉仕の喜びと幸せ
とを噛みしめながら更なる奉仕活
動へと意欲を燃やして毎週の練習
に励んでいるところであります。

『BEA FRIEND』〔注2〕
せっかくのオーストラリア遠征、

ことを意味する無線用語)がかなっ
たのです。

早速両ロータリークラブのバナー
(旗)やお土産の交換に始まり、もの
の三分と経たないうちに、お互いに
「百年の知己の如く」すっかり打ち
解けて、話題は日本国内や全世界の
無線情報、お互いの仕事や家族のこ
と、そして今回私どもがはるばるシ
ドニーまで演奏をしにきた理由等々、
二人だけの水入らずの会話はあつと
言う間に四〇分を経過。再会を約し
て私はオペラハウスへ直行、彼は職
場へ、というところで、極めて短いが
しかし、大変に密度の濃いアイボー
ルQSOとなったことでした。

Hamとは何と素晴らしい趣味で
はありませんか！ その名の示す通
り、まさに『KING OF HO
BBY』であります。このHamを
通して『BEA FRIEND』
が実践できたのですから。

「友を求めて三千里」はるか遠く
の南の国オーストラリアに、このよ
うな立派な生涯の友を得ることがで
きたことに、また大きな幸せを感じ
ている次第です。今からでも決して
遅くはありません。皆さんもこの「趣
味の王様、Ham」を始めてみません
か！この南国土佐の高知から世界中
どこへでもあなたの情報を発信し、
新しい友達を作ることができるので



す！ちなみに私のコールサインはJ
A5CBGです。皆さんと空(電波)
でお目にかかれ、友達になれたらど
んなに素晴らしいことでしょう！
私達が帰国して程なく、あのオペ
ラハウスで私たちフラワースングク
ラブの演奏を鑑賞されたROAR会
員のポーラー氏から、この演奏につ
いての詳細な論評が送られてきまし
た。

以上が、はるかかなた、南半球の
大陸の地に新しい心の友をつくるこ
とができた、『BEA FRIEND』
の実践と、合唱音楽を通して
国際親善の一端を果たすことができ
た私の貴重な体験のひとつまでです。



かなうことならこの機会にシドニー
在住のROAR〔注3〕会員に会え
ればどんなに素晴らしいことだろう
と考え、会員の一人シドニー市内在
住の、VK2XFS/Mr. Blair
Bowler氏(世界救世軍
司令官としての傍ら前年度は豪州R
OAR機関誌の編集者)に連絡をと
った結果、その念願がかない、合唱
団のリハーサルの合間を縫って、我
々の宿舎であるルネッサンス・ホテ
ルにおいて彼と『EYEBALL
QSO』(互いに目と目を合わせて
行う通信。即ち、通常は電波のみに
よって交信を行っているHam仲間が
今回のように実際に互いに訪問し合
い、目と目を合わせて(日本語では、
膝をつき合わせて)親しく会談する

〔注1〕昭和二十年(一九四五)の暮れ、
第二次世界大戦の終戦直後「荒廃した
人心に燈火を・生活に潤いを」との願
いから筆者が当時の県立高知第一高等
女学校(現丸の内高校の前身)の教え子
達を母体として設立した混声合唱団で、
その目的を「合唱音楽を通して社会に
奉仕する」とし、指揮者以下全員無報
酬で今日まで五十年間、演奏による奉
仕活動を続けてきており、その間国内
は仙台・東京・大阪をはじめ全国の各
主要都市において演奏を行う外、これ
までに米国三回、西ドイツ、中国、台
湾、チェコスロヴァキア(プラハ)、そ
れに今回のオーストラリア各一回と、
現在まで合計七回の海外演奏を実施し、
各国との文化交流・国際親善のために
演奏活動を続けてきている社会奉仕団
体。

〔注2〕国際ロータリー(現在一五〇
の国家と三四の地理的地域に百二十万
人の会員を擁する奉仕団体)の今年度
の実践テーマ。

〔注3〕毎週定時に、全世界をカバー
するネットワークを通してグローバル
にロータリー情報を交換し合い、研究
・親睦を深めている(国際ロータリー
推奨の)ロータリアンによるアマチュ
ア無線家の親睦団体。

(高知大学名誉教授
フラワースングクラブ主宰)

土佐の褐牛 (アカウシ) その4

町田 隆彦

【土佐牛優良遺伝子保留】

有名なフランス料理の「ポトフ」「ブル・ア・ラ・モード」「ブルゴニユ風煮込み料理」などは、脂肪の少ない牛肉を長時間煮込みいろいろなお肉で味わうことが特徴であるが、これはフランス全土で生産される多種のワインの味を楽しむための料理として発達し世界を風靡した。一九五〇年以降、フランスにおいてもウイスキーやビールの消費量が急増するに及んで、「ビーフステーキ」「ローストビーフ」のような単品の「焼く」調理法が定着した。ひとつには、高脂肪・高カロリーになりがちな煮込み料理よりも余分な脂肪を焼くことによって落とす料理が喜ばれるようになったこと、また、経済発展を契機に時間のかかる煮込み料理よりも短時間でできる「焼く」料理を消費者が望むようになったのではないだろうか。それには、若干の脂肪交雑がないと硬くてまずいのでウイスキー・ビール文化のアメリカ牛肉にはある程度の脂肪交雑が要求されている。来日した欧米の牛肉専門家も和牛肉の芸術的な霜降り肉の美味さには脱帽し、和牛の遺伝子をもつごく欲しがっている。先般、アメリカ・カナダの牧場主から高知県に対し、「無駄な脂肪が少なく赤

肉割合が多い上に適当な脂肪交雑を持ち合わせている優れた土佐牛を購入したい」との申し入れがあったが、現時点で土佐牛を外国に持ち出されたい和牛肉が逆輸入されると土佐牛生産農家は壊滅的な打撃をうけるので、その事情を説明しお断りした。しかし、いつまでも困い続けるものではないので(昨年には三十五頭の和牛が海外に持ち出された)優良遺伝子の保留に努めるとともに和牛の国際性をもった生産力の確立に努めなければならない。

【薬漬けの農業における牛肉生産の現状】

現在、国内外に流通している動物用医薬品は二千種を超すといわれており、抗菌性物質・ワクチン・ホルモン剤・ビタミン剤・消毒剤・駆虫剤などは家畜生産に不可欠とされている。細菌感染症に発病した動物は、抗菌性薬剤を注射あるいは経口投与されるが、使用にあたっては食肉供用前三十日以後の使用禁止、食肉の中にこれら薬剤が残留してはならないなど日本には厳しい規制がある。とくに自然に恵まれた高知県の中山間地で飼育されている土佐牛は薬の使用の少ない健康で安全な牛肉を生産目標にしている。

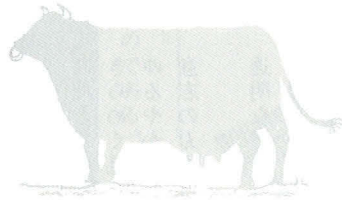
一方、外国での規制を見てみると、

アメリカでは、抗生物質やサルファ剤がよく使われ、危険だと言われているテトラサイクリンも世界の生産量の三分の二がアメリカで消費されている。レーガン大統領以後、さらに規制の緩和が進められている。ヨーロッパはアメリカよりも規制は厳しいが、特定の国からの安物のいわゆるゾロ製品が流入し、医薬品の品質面で問題があるといわれている。オーストラリア、ニュージーランドは、放牧が主体であるので動物薬の使用は少ないが反面、牧草に対する農薬が輸入牛肉に残留していることが話題になった。

【農業に対する外圧・内圧】

牛肉に限らず農業全体が輸入農産物に圧され、青息吐息の状態である。原材料の乏しい我が国の農業では肥料・農薬・飼料等のほとんどは輸入に頼らざるを得ず、生産費の極端に安い外国の輸入農産物とは価格面で到底太刀打ちできない。経団連のお偉方から「コストダウンできない農業はもはや日本で生産する必要はない。安い食品を外国からほとんど輸入すればよい」との発言があったが、アメリカからの日本パッシングの原因となる五百億ドルを超す貿易黒字の原因は、彼ら工業界の自動車・電化製品などであって、日本は

農産物の世界一輸入国であり食糧自給率は先進国の中で最低である。穀物に至ってはわずか三〇%、カロリー換算でも五〇%足らずの自給率しかない。自由化されたもので生き残っている農産物はこれまでにないという歴史をみれば、日本の農業ひいては食糧確保の将来に大いに不安がある。先進各国とも食糧は国民生活の根底をなすものとして近年、ほとんどの国が多額の補助金を出して一〇〇%近い自給率を達成している。昭和六十二年まで日本には、農産物輸入制限の十二品目が存在したが、アメリカからガット違反として提訴され(アメリカも輸入制限農産物が数品目存在している)、六十三年二月に小麦・落花生・パイナップル・羊毛・卵・鶏肉・豚肉・チーズの八品目が、また平成三年には牛肉とオレンジが自由化された。今度は米において然りである。日本がこのうえ農産物を完全自由化しても五十億六千億ドル程度の輸入増にしかならないという。農業を厚く保護するE.C.(W.T.O)との農業戦争に敗れたのを機にアメリカが国内の農業政策の矛盾を日本・韓国・台湾などのアジアの対米貿易黒字国に矛先を向けてきたわけで、牛肉・オレンジの自由化に際して「牛肉か自動車か」「ガットか二国間協議か」と迫ったわけ



五万も牛肉を輸入している。

【日本人の食生活にたいする反省】

世界の人口は現在五十数億であるが、毎年一億の割合で増え続け二〇五〇年を待たずして百億になることが予想されている。世界の食糧生産高は六十億の民を養うのがいっぱい、とくに人口の増加割合が多いアジア・アフリカの貧しい国では現在でも数億の民が飢えているが、将来

はもっと悲惨な状態が予想される。しかも、これまで穀物の輸出国であった中国・タイ・マレーシアなどは、近年、工業化が急速に進展しそれに伴って広大な農地が潰され農業生産が鈍化し将来は食糧輸入国に移行するといわれている。にもかかわらず、日本が金の力で食糧を買い漁り贅沢に食べ散らかして捨てる。日本の人口は世界の二%に過ぎないが世界の穀物の一四%を、エビ・カニ・マグロなどの高級魚介類に至っては六〇%近くを日本が食べている。このようになわがままが、いつまでも続けられるであろうか。少なくとも日本人が自分の食べる食糧の大半を自国で生産することが貧しい途上国の食糧を潤沢にすることにひいては国際貢献に繋がるのではないだろうか。昨年から西日本を中心に水不足が深刻となっているが、農林業の機能としては農林生産物の生産だけでなく、水資源涵養と浄化・洪水の防止・土砂崩壊防止・汚染浄化分解・大気の浄化・気候の緩和・レクリエーション空間の提供など環境保全機能の効果を試算すれば四十〜五十兆円以上あるという。ここで日本人は、農業を食糧生産のみならず環境保全の面からも考え直す時期にきているのではないだろうか。(完)

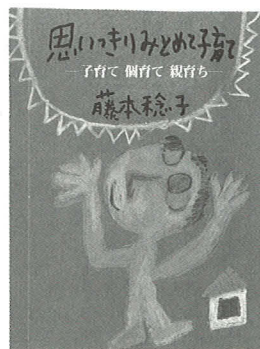
(高知大学名誉教授)

思いっきりみとめて子育て

—子育て 個育て 親育ち—

藤本 稔子著 四六判・並製本・352頁・定価1,600円

三十八年の豊かな保育経験をもつ元園長がつづる素顔の子どもたち。子どもを知り、愛し、認め、働きかけをするなかで、どの子ども大きく伸びていく。



酔星の版画家——日和崎尊夫 ①

——その詩人的側面——

坂本 稔

*はじめに

画家・日和崎尊夫は、その人間的資質において紛れも無く一個の「詩人」であった。彼がもしも画家を志していなかったならば、おそらく優れた叙情詩人となっていたであろう。今回は、彼の書き残した数少ない作品を基に、この画家の詩人的側面にささやかなアプローチを試みることにしたい。

航海

星のうちよせる
海の上を
ハートの帆を張った
ひとりの男が船になって流れてゆく
風のない
波の水のなか

ひとりぼっちの男の追憶が
錨になる

時間とすべての愛をのせて
きらめく星をぬって
ゆるやかにすべる
意志の刃物の船よ

透明なガラスの結晶の
亀裂をつなぎ
愛の血の接着剤は
痛ましく叫んでいるのか

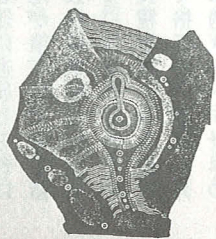
光のなか
船は命の羅針盤に
流れゆく渦の輝く処
こだまする意志の旅の果て――

この詩は、日和崎が昭和四十一年に「南方手帖」第六集に発表した作品である。前回にも述べたように、喫茶「セザンヌ」をたまり場とする

多くの芸術家たちに支えられて、私はその当時としてはかなり贅沢な個人誌としての「南方手帖」を編集・発行し、それなりの数の一般読者をも獲得していた。それには、毎号の表紙を担当してくれていた日和崎尊夫の作品の魅力に負うところが少なくなかったと言える。その彼が、ある日「ほくも時折詩を書いていますが、一度見てくれませんか」と言うので、期待していたところに現れたのが上記の「航海」であった。

この詩を書いたころの日和崎尊夫はまだ二十四、五歳であった。美大を出て高知に帰り、木口木版の新天地を切り開こうとして、日夜、旺盛な制作意欲を燃やしていた時期に当たる。まさに若き芸術家としての「航海」が始まったばかりの時代であった。

南方手帖



第9集 夏1967

表紙を飾る日和崎尊夫の初期作品

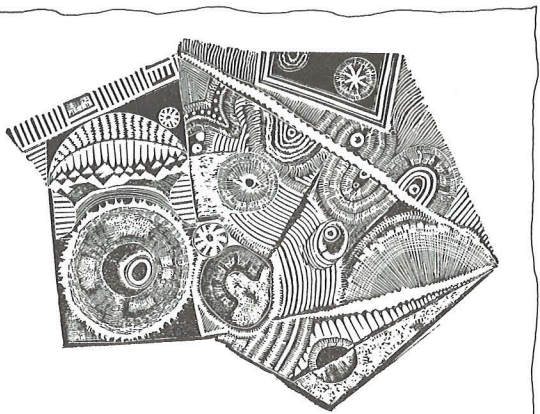
航海というよりもむしろ漂流といふにふさわしいものであった。昭和五十四年刊行の『鑿』創刊号に彼自身の表白が見られる。
「カルバからカルパへの永劫の輪廻の中で己とはまさに一塊の漂流物である」

瞳

瞳がきらっと光った
ぼくが覗き込むと
深い云い様のない潮が見えた
ほんとうは
はじめぼくは
それを湖だとおもったぐらいでした

あなたの その中で
ぼくは素裸になって
しばらく泳いでいたのですよ

右の詩は「航海」とほぼ同時期に彼の日記の中に書き残されていたも



燃える星たちの九月

燃える星たちの九月
朽ちた船や
犬たちの骨の砂浜
へお母さん もつと ぼくを埋めてよう
黄色い星たちの九月
海は閉じ
貝殻は黒い
へよい子 お眠り 犬のお友だち
燃える星たちの九月
夢にさえ
扉はきしる
魚の声で
少年のかすれた声で

詩・坂本 稔
画・日和崎尊夫

詩画集『星と舟の唄』(1966年・南方手帖刊)より

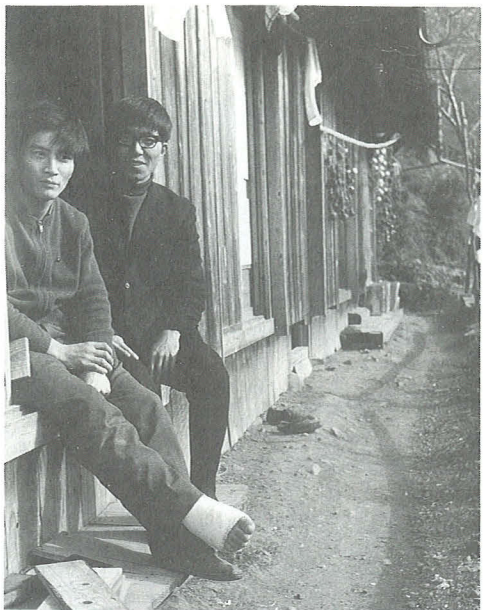
神経を集中しての厳しい版画制作の仕事から解放されたひととき、リラックスした気分でのひとりの女性を対象にして、彼女にささやきかけるような気分での日記に書き記したものであろう。
酒と喧嘩が大好きであった、この天才的版画家の滅多に人に見せなかつた一面を窺い知ることができて興味深いものがある。(続)
(日本詩人クラブ会員)

*付記

本稿に「瞳」を引用するに際しては、日記所有者である町田恵さんの了承を得た。ご好意に深謝。

《日和崎尊夫略歴》

- 一九四一年(昭和十六年) 高知市生
- 六三年 武蔵野美術校修
- 六六年 日本版画協会新人賞受賞
- 六七年 同協会賞受賞
- 六九年 第2回フィレンツェ国際版画ビエンナーレ展金賞受賞
- 七四年 文化庁芸術家在外研修員として渡欧留学
- 九二年 四月高知市で死去
- ☆今年七月、県立美術館において遺作展開催の予定。



昭和40年12月、橋原町初瀬西小学校教員住宅にて日和崎尊夫(左)と筆者

のである。なんとも優しく品の良い作品である。これが、あの激しい意志的な「航海」を書いた同じ人のものとは、にわかに信じ難い。素朴で繊細、含羞の感情に溢れる美しい抒情詩である。何処かに発表しようという思い

地域に根ざした空間の創造と都市美

高知市都市美デザイン賞は今回第十一回となる。これを一つの節目として促え、審査にさきだち、「賞」の選考基準について再度確認するとともに、今後留意すべき視点について検討がなされた。

本選考の二回の現地調査と選考会での論議の結果、入賞として「国民宿舎 桂浜荘」「星ヶ岡アートヴィレッジ I・II」「帯屋町公園・駐輪場」の3件が選ばれた。

*国民宿舎 桂浜荘

発注者 高知市

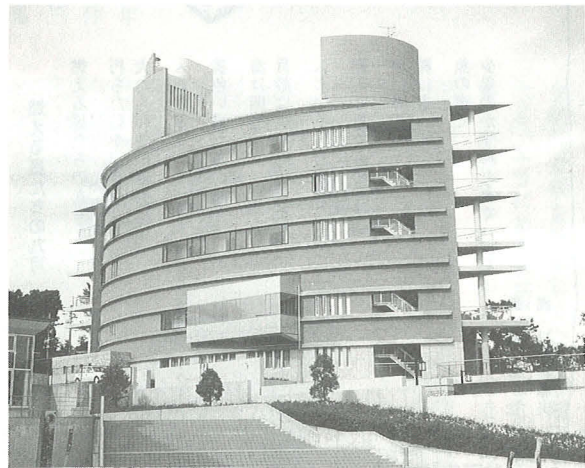
設計者 合資会社 上田建築事務所

所 株式会社 日建設計

美創出のモデルとなる ②壁画、彫刻、その他これに類するもので、文化的・芸術的環境をつくり上げていく ③総合的に計画された建築群で良好な町並みの景観を創りだしている ④周辺地域のシンボルとなるものを対象としてきているが、都市環境に対する明確な意思をもつ計画・構成の有無、規模の大小にかかわらず地域環境への影響の度合い、さまざまな表現・性能の感性への働きかけ、といった側面をより重視して審査にあたることとなった。

今回の推薦件数は34件（推薦対象は28件）であり、例年よりは少なめであるが、それぞれが個性的であり、また地域・環境、敷地へのさまざまな提案がなされていた。予備選考・

桂浜の坂本龍馬記念館に隣接するこの建物は、あらゆる面で龍馬記念館との対比と調和を考へて建てられている。日本屈指の景勝地である桂浜は、素晴らしい環境と眺望に恵まれており、また近年石垣が発見されて話題となった浦戸城跡でもあり、歴史的にも大変重要な位置にある。そういう意味でこの建物は、名所・旧跡地における建築への一つの提案として受け取ることができる。具体的には①高知の厳しい自然環境を考慮した耐塩害性、耐風性 ②風土に根ざした



せることによる物語性の創造 ⑤自然採光、自然換気の採用と多機能性などであるが、さらに遠景として促えた場合のシンボル性と色彩の調和、龍馬記念館の環境を損なうことなく調和のとれた新しい空間を創造したことは、こうした条件下での建築・建造の参考となる。

材料である石灰の割石張りや水切り工法の積極的採用 ③建物からの景観と、桂浜からの景観の環境への調和 ④龍馬記念館と対比・調和さ

*星ヶ岡アートヴィレッジ I・II

発注者 平岡 望・平岡 護

設計者 聖建築研究所・松澤敏明建築研究所・ライフ建築工房

横内の坂道を上った所に二棟の大屋根の民家が配置されている。この建物は個人住宅として建てられたもので、居住空間の外に茶室、ギャラリー、喫茶を備えている。この建物は、①伝統的な民家の架構を再現し、②土佐産の木材や漆喰をふんだんに使用 ③急斜面の敷地をうまく生かしたスキップフロアによる全体構成 ④大屋根下の半戸外空間の採用と二棟の建物の配置と構成が評価された。小高い丘の上にある木造建物として、周囲の景観にうまく調和し、形の良い大屋根が直交した空間は、不思議になつかしさを感じさせる。木造の二棟の建物と周囲の石垣、植栽は年月とともにさらに調和し、落ち着きを増すものと思われる。数年後には、場所性をもった高知にふさわしい建物となる。

*帯屋町公園・駐輪場

発注者 高知市

設計者 株式会社 千頭建築研究所

おびさんロード商店街の一角にある帯屋町公園に駐輪場を併設した公園再整備計画の一環として取り組まれたものである。全体的には帯屋町

とおびさんロードとの連絡動線の取り方や駐輪場の利用方法など、敷地が狭いこともあって非常に難しい点であったと思われる。それらの解決策として、①駐輪場を地下へ設け、公園を少し上げる設計で、地下動線を短縮し、利用化をはかる ②公園前の道路と一体化させる ③公園歩

行部は透水性材料で、平滑で清潔なもの ④歩行者動線、休息場所、便所棟、彫刻作品等の配置 ⑤周辺店舗との調和など随所に工夫がみられ、効果をあげている。

この公園計画では道路建設課、みどり課、商店街振興組合、教育委員会等、多組織が参入しており、単体の建造物の設計・施工とは違う難しさをみせている。その



調整の難しさを解決して中心街に複合機能を持った新しい空間を完成させたことは高く評価される。

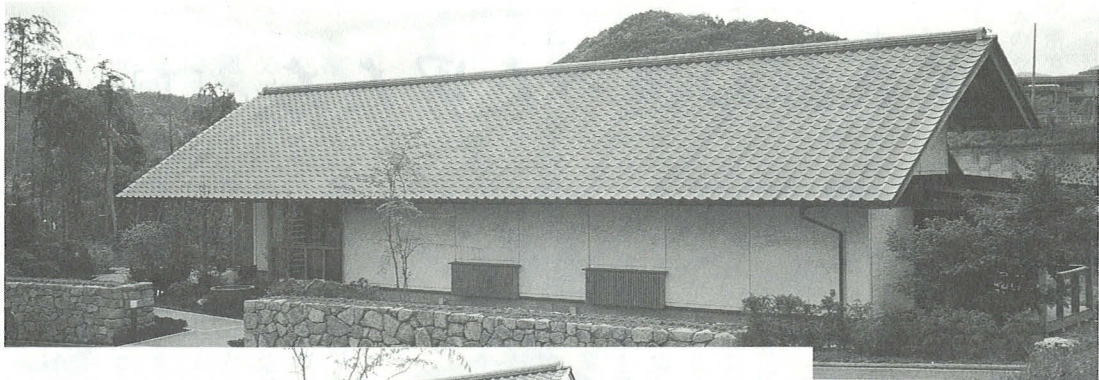
☆

全体を通じて今回の推薦対象は建物24件、公園・道路4件であり、例年と同様、建築物が多い。やはり都

市美」ということで建築物がすぐにイメージされるが、今後は、公園・道路・モニュメントなどでも、興味ある建造物が創出されることを期待している。

特に公園・道路などは、都市美を考えた意匠にまでもっていくことが難しく、また設計者も少ないということもあるが、その公共性からいって、都市美に与える影響は非常に大きいと考えられる。そのためには公園・道路を含む土木面で、建築意匠的な要素の設計が求められるし、また、それを裏付ける予算確保が重要であり、行政サイドの文化意識の向上に加え、担当者が意匠感覚・感性を身につけることが大切であると思われる。行政が関係する建造物、土木工事には、都市美デザインの手本となる試みを提案すべきである。また行政、市民共に意識改革をすすめる、全体的に文化を見る目を育てることも必要であろう。こうしたあらゆる面での地道な取り組みをすすめる中で、質の高い、文化性あふれる都市空間、本当の意味での「都市美」が創出されていくことになるのではないだろうか。胸を張って、自信を持って次世代に引き継ぐことのできる「高知市」が創造されることを期待している。

(高知工業高校教諭)



紫式部の造った男たち [I]

桐壺帝 —プロローグとして—

藤田 加代

「紫式部の造った男性たち」ということで六回のシリーズを組むに当たり、さて誰を、と考えますと、源氏物語の三世代を構成している光源氏と頭中将、夕霧と柏木、薫と匂宮のどれをもはずせないように思われます。しかし今回はそれに加えて、光源氏の親たちの物語から源氏物語を眺めてみたいのです。とりわけ、王朝撰関政治体制の場で、撰関家や権門の娘たちをさしおいて、一人の女人を熱愛した「帝王の愛」について考え、それが源氏物語世界を紡ぎ出すこととどう関わるか、ぜひ問題にしてみたいと思います。私が最初に登場させる人物は、そういうわけで、光源氏の父、桐壺帝ということになります。

いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり

源氏物語は右の冒頭文で始まりです。古い物語の冒頭形式が「今は昔」や「昔」だったのに比べて、源氏物語の冒頭は新しい試みに満ちていますが、ここではこの文が、単に一つの巻の女主人公の紹介ではなく、帝王の反社会的反通念的な熱い愛のありようを表現するものであることを、述べておけば足りるでしょう。つま

り「いとやむごとなき際にはあらぬ」一人の女人が帝の寵愛を受けて「時めく」という、異常な事態または異常な宮廷状況の存在を表明するものとして、この冒頭文を読む必要があるわけです。

ところで、冒頭文中の「いとやむごとなき際にはあらぬ」、これが光源氏の母で桐壺更衣と呼ばれる人の描写です。「真正正銘の権門」「貴族中の貴族」というほどの出自ではないのですが、しかし決して低い身分とは言えない女人、それが「いとやむごとなき際にはあらぬ」の意味する人でした。

しかし、王朝撰関政治体制下の後宮で、「すぐれて時めく」資格は、押しも押されぬ大貴族で、当主が世の信望を集め、社会的認知を得ている権門の娘たちであることを条件としました。そして源氏物語初発部で、「すぐれて時めく」資格ありと自他ともに認めていた人は、右大臣家の弘徽殿女御であり、それに続く権勢の家の女御たちだったはずで、そうした現実の価値体系によって支えられる後宮の秩序を尊重することが、帝王に期待される愛のあり

ようでもあったのです。

ところが、醍醐帝のイメージを重ねて造型されたという桐壺帝は、「すぐれて時めく」はずのない故按察使大納言の娘を熱愛しました。無視されようのない権門の娘たちをさしおいて、王朝朝廷の秩序を侵し愛の本然のままに振舞ったのが、桐壺帝だったのです。そして、その危うい熱愛の中から誕生したのが源氏物語の主人公だったというわけです。

桐壺帝はしかし何故、この危うい反通念的な愛に激しく突き動かされたのでしょうか。このあたりは、藤原氏全盛の世に藤原物語でなく源氏物語を書いた紫式部の、時代を見る眼と創作意識とに大きく関わるのでしよう。

源氏物語には四代の帝が登場しますが、桐壺帝の第一皇子、光源氏の兄に当たる気弱な朱雀帝に、撰関政治に搦め捕られてとりわけ衰弱した王権のさまが見られます。しかし桐壺帝には親政を望む気概があります。彼の愛も、秩序に取り込まれ、しきりに塗り込められて、息の根を止

められかけている帝王の人間性回復の所為であり、真の王権奪還を願う人のやむにやまれぬ行為だったようにも思われます。

確かに桐壺更衣には、「なつかしうらうたげな」優しさといじらしさがありました。「さま容貌」が「めでたく」、「心ばせ」が「なだらか」で「人がら」が「あはれ」でした。男心に抱きとめられ男心を抱きとめる、とりわけ魅惑的な女人だと描かれます。しかし、青年期の激情を算用に入れるにしても、「聖代の帝」と称えられる桐壺帝の行動を、女の魅力に惑った上での偏愛、と読むだけでは、何か読み残しがありそうです。

権勢に守られ飾られて、「時めく」ことを当然と思う傲慢な姫たちの中で、父の死後、母の手一つの後見で「心細げに」宮仕えする桐壺更衣の姿は、帝の心をひいたことでしよう。わが愛だけを「頼み」に宮仕えするこの女人が、体制に羽交い絞めされた帝にはただじらしく、わが手で庇護し取り立ててやりたい愛の対象と映ったに相違ないのです。

今一つ、故按察使大納言家は、源氏物語初発部で権勢を誇っている藤原系の左右大臣家などは、家系を異にしています。そうした家系で、しかも父の死後その遺言でする宮仕



えは、没落に瀕している名門の開運を賭けた一種の戦いということになるわけで、これまた王権の行方を思う帝と、桐壺更衣はどこか相似た人物だったのかも知れません。二人は

立場は違いながら、不思議な同質性を持つ男女として、相寄る魂の体験を持ったのではないのでしょうか。

光源氏の親たちの物語は、存在を許されない人間的な愛が、一つ一つ封殺され、その行く手に源氏物語の道のりを遙かに指し示すものだったと言えましょう。

嫉妬や羨望、政治的非難や中傷の中、前途に破滅しかないこの愛は更衣の死をもって閉じられ、帝の深い追慕の思いが残ります。更衣の昇任も忘れ形見の立坊も、帝の願いのすべては「かぎり」ある現実の前に葬り去られました。皇子の賜姓源氏を決意したのも、親王宣下することすら危うい政治状況を見て取った、桐壺帝の選択でした。愛の人として生きる光源氏の、苦難を背負い危機に瀕しつつ、限りなく王権に回帰するその生涯は、彼の誕生に先立つ親たちの愛の物語が指し示すものだったはずで、そしてその途上、桐壺帝は光源氏を守護霊のように見守り続けるのです。

(高知女子大学保育短期大学部教授)

賛助会員募集中!!

年額 2,000円

- ① 機関紙「文化高知」を年6回お手元にお届けします。
 - ② 事業団発行の出版物の10%割引 (一部例外あり)
 - ③ 主催事業や刊行物の案内 (マスコミ利用の場合あり)
- 【※上記特典は申し込みいただいた日から1カ年有効】

①郵便振替 ②現金書留 ③直接事業団へ…

いずれの方法でもけっこうです。

費 典
会 特

※お申し込み

信仰の道、情報の道

海老塚 和秀

八十八の札所を結ぶ遍路道は信仰の道であり、同時にそれは情報・技術の伝播の道でもあった。四国霊場を訪れるお遍路さんによって古くから様々な技術が四国の地にもたらされたり、逆に四国独自の技術・製法がお遍路さんによって他国に伝えられた。その辺の事情は坂本正夫先生（高知大学非常勤講師）のご研究に詳しい。

先生その調査・研究からいくつかを拾ってみると、たとえば、巡礼中のお遍路さんより稲の薄植えの方法を教えられ収穫を上げた東諸木村の事例。紀州の遍路よりもたらされた安芸の八太網漁法。また、当地の技術が伝えられた例としては、高知市の丹吉の釣り針の製法がそこに逗留していた遍路によって習得され播州へ伝えられた例もある。あるいは、徳島の大谷焼は豊後の遍路より、ま

た、各地に伝わるお灸の技術も遍路灸として、等々。このように、農業、漁業、産業、医療等様々な方面にわたって遍路によってもたらされた技術や情報は枚挙にいとまがない。こうして、土地の人々とその地を訪れるお遍路さんの交流を通して四国各地で「遍路文化」が開花しているのである。最近では海外からの人々の遍路姿



を眼にする機会も多くなった。昨年の夏、オランダ・ライデン大学の教授・学生の一行十名が徒歩による四国遍路を行った。交通事情がよくなくなったとはいえ、自家用車で八日間、団体バスで二週間、徒歩ともなれば平均四十五日を要する。四国遍路を通じて日本人の宗教心や人間関係、文化構造などを探ろうとするのが彼らの目的であった。

私の寺を訪れた一行に今回の遍路の旅で一番印象に残ったことを尋ねてみると、うれしい答えが返ってきた。それは一行が室戸の町を通りかかったときのこと。ちょうど下校途中の小学生の二団とすれ違った。剃髪頭で、その大きな体を白衣にくるんだ一行を見て、「あ、外人が来た」と子供達から歓声が上がった。すると、その中の一人が「違うで。あれはお遍路さんやで」と仲間の言葉を

制したというのである。出自や身分、境遇をどんなに異にしていようと白装束に身を包んだ者は皆、お遍路さんでありお大師さんの分身であると平等に受け入れてきた四国の人々の温かいお接待のまごころが今もお、そんな子供達にも連綿と受け継がれていることに直に触れることができたのだと話してくれた。かつて、この地を訪れるお遍路さんとの交流によって四国各地に様々な文化が芽生えた。それは異質なものの出合うことにより新しいものが生じることであった。経済面であれ、その他の面であれ、様々な点でその遅れを指摘される四国であるが、遍路を志す者にとって四国の地全体が聖地なのである。イスラームのメッカ、ヨーロッパ各地におけるキリストの聖地、あるいは、チベット・カイルア山など世界的にその名を知られる聖地巡礼とその規模、巡拝者の数等、決して引けを取るものではない。

豊かな自然に恵まれた大いなる島。巡礼をもてなすことによって育まれた精神的土壌。それらを通して、これからも、この四国の地に新しい独自の文化が芽生え、花開いていくことだろうと信じている。(完)



第11回写真コンテスト・高知を撮る入賞作品

高知を撮る

田植えの頃 田村 豊成

いま話題になっている骨粗鬆症は、骨のカルシウムが不足するもので、とくに更年期以降の女性は要警戒だが、若い人にも結構あるらしい。症状が進行すると骨折しやすくなったり、寝たきりになったりする。予防としては、骨を元気にする食品をたっぷり摂取する必要がある。たとえば牛乳、乳製品、魚介類、大豆製品、緑黄色野菜、海藻類、切り干し大根、高野豆腐、そのほか蛋白質の多い食品などである。

高知県の県民栄養調査でも、唯一所要量に満たない栄養素がカルシウムだといふのだから、日ごろからこうしたものを摂取することに心掛けるべきだ。そしていま一つ適度な運動

が欠かせない。運動による骨への機械的な刺激が、骨のミネラル含有量を増加させるからである。大袈裟に考えなくても、雑巾掛けや布団の上げ下ろしといったことも、十分骨の刺激となっているらしい。例えば両手をついての雑巾掛けでは、心拍数は二三

家事有用

風俗歳時記



〇、ゴマを擦る作業では一〇〇、布団の上げ下ろしでは二〇〇ほどの運動になるという。つまり心拍数一〇〇を越す適度なトレーニングを、昔の女性は意識せずに家事を通してやっていたことになる。いまは電化製品や既成食品の普及などで、家事は省力化の一途であるが、久保田競氏(京大霊長類研究所教授)の『手のしくみと脳の発達』(朱鷺書房)によると、現代の人々は手を使わなくなるとともに、手や足を働かせる「あたま」も同時に使わなくなっているという。脳の神経細胞は二十歳前後から老化がはじまるが、手をつかうことによる脳への刺激を加えつづけるならば、その老化が大いに防げるというのだ。

そこで氏は、老化防止の一つとして碁や将棋、俳句、短歌、詩作などとともに、切る、削ぐ、剥ぐ、刻む、焼く、煮る、炊くなど実に多様な作業をもつ料理の効用を説く。献立を考えて、これを順序よくつくる段取り(計画)も脳へのいい刺激である。家事有用といふべきか。(晋)

吹奏楽部復活への取り組み

谷相 勝二

この会は平成五年九月に発足し、現在、会員三十一名。発足のきっかけは「吹奏楽部は廃部寸前」だと聞いて、全盛期だった頃のOBが「もう一度昔のような吹奏楽部に戻りたい」と声をかけ合い設立したものです。

しかし吹奏楽部の活動が学校教育の一環として行われている以上、直接口を出すことはできませんので、寄付を募って楽器を購入し貸し与えていく等、どうしても側面からの援助とならざるを得ません。

また、今、何より問題なのは指導者がいないことで、OBがたまに教えに行く以外自主練習でやっています。しかし、練習だけでは嫌になるだろうと思いい、夏期合宿を企画したり文化祭ではOBとの合同演奏会を催し、昨年暮れには四校合同コンサートにも強引に参加させました。まだ



「岡豊吹奏楽団」

「音を楽しむ」をモットーに

友草 直子

岡豊吹奏楽団は発足して七年、本格的に活動を始めて四年くらいになります。もともとは岡豊高校のOBで結成しましたが、今ではその域を越え、OBに限らず音楽好きの仲間が集まり、年齢層も十九歳から四十代までと幅広くなりました。

この団では、「音楽」の字の表すごとく、音を楽しむ、スタイルにこだわらず自由に音楽をしようをモットーに、週一回のペースで活動中です。

今年二月には、念願の初コンサートも開くことができ、現在は来年の第二回開催に向け、聴きに来ていただいた方に「楽しかったね」と言ってもらえるようなコンサートを目指し、今から曲決め、構成などに取り組んでいます。

しかし、人数、演奏レベル等まだまだ足りないものがたくさんあります。

ところで、ここまで読むとちやんとや



「高知商業OB吹奏楽団」

十七歳ですそろそろ一人前です

大野 嘉裕

昭和五十三年、高知商業高校創立八〇周年を機に有志をつのり発足しました。早いものでそれからもう十七年も経ってしまいました。発足当時は団員も少なく、力不足もあり、団単独での演奏会を開けないため、もっぱら現役の吹奏楽部の発表会に便乗して、その二部で舞台上に立たせてもらうという立場に甘んじていました。

その後、徐々に団員も増え、現在では五十名を数え、また、単独のコンサートを年一回定期的に開催できるようになりました。今年六月十七日(土)、オレンジホールで開催予定の曲目はロデオ全曲と一九九五年度全日本吹奏楽コンクール課題曲外です。是非聴きにきてください。

さて、特徴といえるかどうかわかりませんが、母校の商業高校の強いバックアップがあ



散歩の途中で



紅水川の中・下流は、垂直に近いコンクリートで囲まれている。水辺というにはやや殺風景になっており、ひと工夫欲しいところ。その試みひとつと思われるが、昇降口の両サイドに植樹帯が設けられていた。

風伯

出処進退

ます城山三郎氏の文章を引用します。

「いまは、違った意味で先が見通せなくなっている。それなのに先見性のない経営者が会社にしがみついている。はっきりいって、そういう経営者はほとんど辞めたほうがよい。次の世代の人材を育てるには、

とにかくそういう人たちが早く去ることだ。」

そう、その通りです。城山先生、よくぞ仰しゃってくださいました。それでは先生の驥尾について戯れ詩、イヤ、みやざわけんじさん流に、本音の詩を書いてみます。

酒一モノマレズ 女ニモマイラヌ スタ
ミナヲモチ 株主ボスヤ 政治屋ノ圧力ニ
負ケル 弱イ神経ヲカクシ 常ニ腹ニイチ
モツライレ トキタマ出社スレバ 仕事ハ
社員ニマカセテ 信頼シナイ 寝ボケマナ
コト週刊誌ヲ読ミ 二日酔ノ社員ニハ コ
レヲ飲メトクロナサンヤリ 北二濱レン
ウナ系列会社アレバ 行ッテ タルンデイ
ルソト気合ライレ 南ニゴネル株主オレバ
ママアト御氣嫌ヲトリ 労組ヲオダテテ
骨ヲヌキ ストライキハ反社会的タカラヤ
メロトイイ ボーナス 昇給ノ査定ハ総花
主義ヲトリ 社員ヤ平重役カラ話セル男ト
イワレ モライ物ハイヤヌト受ケトリ ア
ラユルコトヲ自分ラ動定ニイレテフルマウ
コウイウ社長ノ椅子ニ イツマデモシガミ
ツイテオリタイ (沌平)

市民フロアのご利用を

展示や会議に最適!

広さ・内装 96㎡壁面布クロス張り、スポットライト完備

所在地 高知市はりまや町一151-1
デンテツターミナルビル5F

お申し込み
(財)高知市文化振興事業団
731-4365

高知市文化振興事業団編 高知のエスプリ	A5判一六〇頁 定価一、二〇〇円
高知県議会の環境会議編 高知レポート	A5判一五五頁 定価一、〇〇〇円
山本 大著 幕末の青春 坂本龍馬の生涯	四六判一六八頁 定価一、二〇〇円
依光 裕編著 珍聞土佐物語 上下巻	四六判 三九五頁 四〇八頁 定価一、六〇〇円
鈴木文彦・井本正人・岡根猪一郎著 協同組合と地域づくり	A5判一三三頁 定価一、〇〇〇円
清達幸男著(高知レポート5) 高知県の工業	A5判一二二頁 定価一、〇〇〇円
外崎光広著 土佐自由民権運動史	A5判四四四頁 定価二、八〇〇円
外崎光広編 土佐自由民権資料集	A5判三四四頁 定価三、〇九〇円
今井嘉彦著(高知レポート2) 河川はよみがえるのか	A5判一〇八頁 定価一、〇三〇円
岡林清水著 高知県文学散歩	四六判二七八頁 定価一、八〇〇円
高知の文化を考える会編 高知の文化を考える	A5判一八八頁 定価一、二〇〇円
高知市文化振興事業団編 わがまち百景	A5変二三四頁 定価一、二〇〇円
筒井広道著 画帳の歳月	A5変二五六頁 定価二、〇〇〇円
土居重俊・浜田教義編 高知県方言辞典	A5判七三六頁 定価六、一八〇円
高木啓夫著 土佐の芸能	B5変三四六頁 定価四、九四四円

飛天 高知公演'95

能楽の夕べ

毎年恒例になりました「飛天」の演奏会も大倉正之助さんの
単独演奏会を含め、今年で5回目となりました。ここに響く
音を伝えるグループ、飛天。今年も好評の四拍子が揃います。

春の宵、ひとときの幽玄の世界にお遊びください。

出演：森田流笛方 内潟慶三 大倉流太鼓方 大倉正之助
幸清流小鼓方 柳原富司忠 金春流太鼓方 中田弘美

プログラム

- 出端神舞 (では かみまい) ● 男舞 (おとこまい)
- 急之舞 (きゅうのまい) ● 構成曲

5月9日(火) 要法寺 高知市筆山町8-5

5月10日(水) 自由民権記念館アトリウム 高知市棧橋通4-14-3

開演：午後7時

入場料：前売2,300円 (中学生1,000円)

当日2,800円 (中学生1,300円)

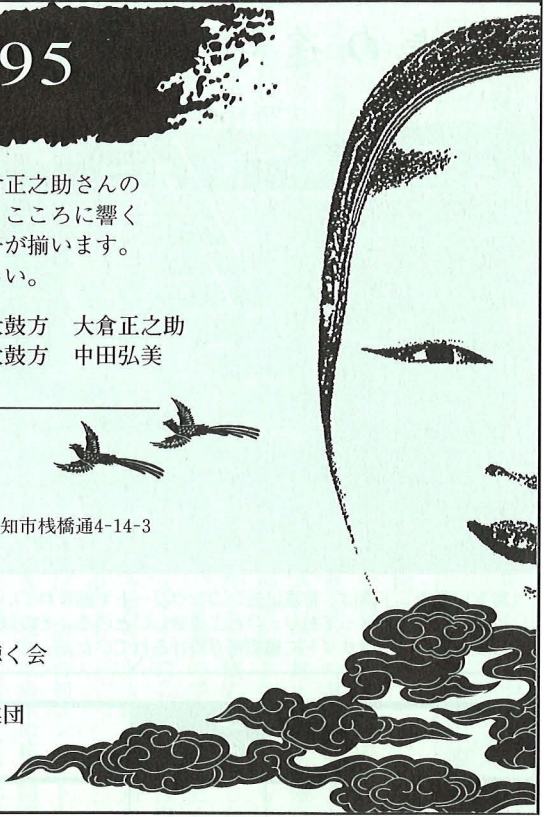
主催：(財)高知市文化振興事業団十飛天を聴く会

チケット発売：高新プレイガイド、チケットセゾン

チケットピア、高知市文化振興事業団

問い合わせ：(財)高知市文化振興事業団

(電話予約) TEL0888-73-4365



高知市文化振興事業団創立10周年記念出版

土佐自由民権運動 日 録

土佐自由民権研究会編

B5判・上製本・函入り 496頁

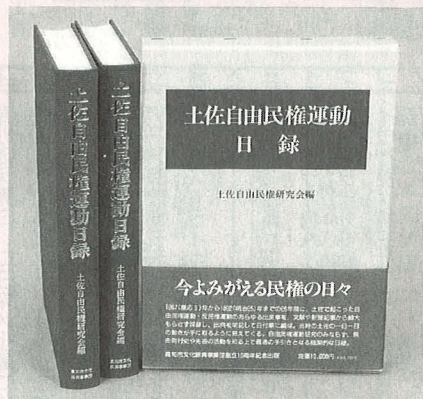
定価10,000円(税込)

民権研究の
偉業、遂に刊行!

1867(慶応3)年から1892(明治25)年までに、土佐で起
こった自由民権運動・反民権運動のあらゆる出来事を資料
・文献・新聞記事等から細大もろさず収録し、日付順
に編成。そのすべての事項に出典を明記した。

民権運動に参加した無名の人々や結社、反民権派の動き
など、従来ほとんど顧みられなかった事項も数多く掘り
起こされている。これにより、当時の土佐の日々の動き
が手に取るように見えてくる。

土佐自由民権研究会が10年余の歳月を費やしてなった
労作であり、自由民権運動研究のみならず、県市町村史
・学校史等の研究や先祖の活動を知る上で最適の手引き
となる画期的な日録。



財団法人 高知市文化振興事業団 〒780 高知市本町5丁目2番3号

TEL (0888) 73-4365
郵便振替 01680-5-14869